

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 イカナゴ

学名 *Ammodytes personatus*

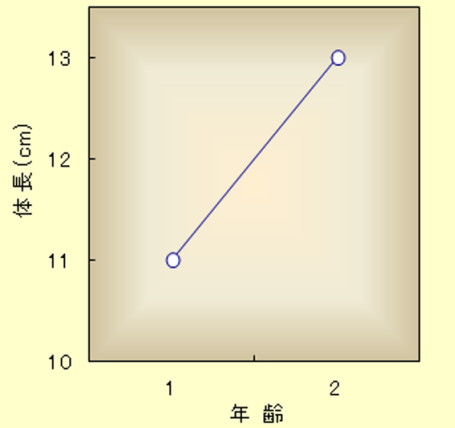
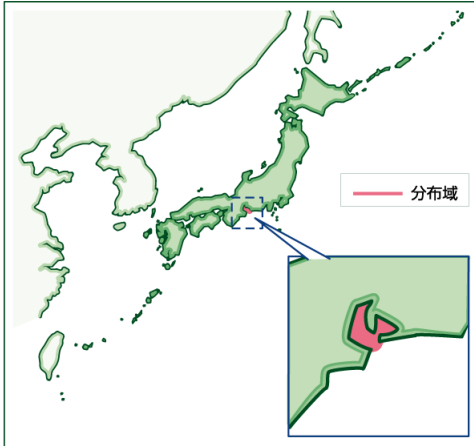
系群名 伊勢・三河湾系群

担当水研 増養殖研究所



生物学的特性

寿命: 2～3歳
成熟開始年齢: 1歳
産卵期・産卵場: 12～1月、伊勢湾の湾口部付近から渥美外海の礫砂の海底
索餌期・索餌場: 夏眠時期(6～1月)には、ほとんど索餌をしない
食性: 動物プランクトン(カイアシ類が主体、ヨコエビ類、ヤムシ類、アミ類も捕食する)
捕食者: 仔稚魚期には多様な浮魚類やヤムシ類、未成魚および成魚期にはヒラメ等多くの底魚

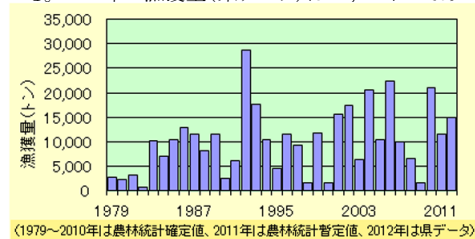


漁業の特徴

2～3月には仔稚魚が、4～5月には未成魚が、そして1～2月には夏眠後の産卵を終えた親魚が漁獲対象となる。仔稚魚と未成魚は船びき網で漁獲され、親魚はすくい網で漁獲されている。ただし、仔稚魚が漁獲量のほとんどを占める。

漁獲の動向

1974年に2.7万トン台であった年間漁獲量はその後大きく減少し、1982年にはわずか699トンにまで落ち込んだ。1983年以降は再び増加したが、その後は1,507(2000年)～28,777トン(1992年)の間で大きな変動を繰り返している。2012年の漁獲量(県データ)は14,875トンであった。

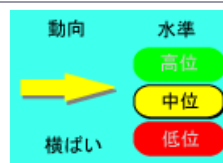


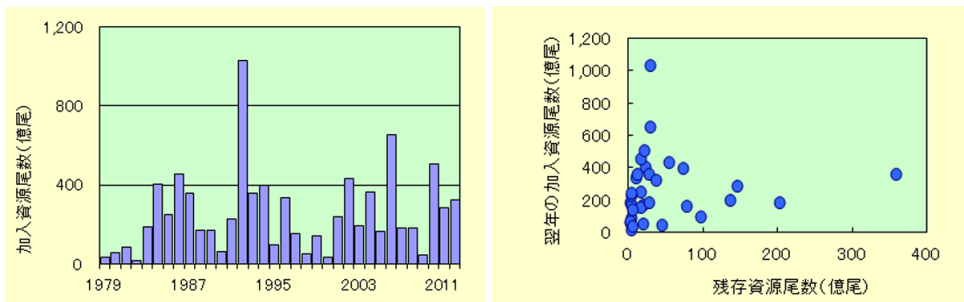
資源評価法

各県で算出された日別漁獲尾数を加算して伊勢・三河湾の漁獲尾数を求めた。これらのデータから算出した各操業日の漁獲尾数および出漁統計データをDeLuryの方法に当てはめ、加入資源尾数と残存資源尾数を推定した。上記の方法で推定された残存資源尾数と翌年の加入資源尾数を用いて再生産関係を検討した。

資源状態

資源水準については、2012年の漁獲量が14,875トン(県データ)で過去20年間の上位から7番目であり、推定加入資源尾数は321億尾で過去20年間の上位から8番目であったことから中位と判断した。2011年の再生産成功率は8.92と平年並みであり、残存資源尾数を36億尾確保したことで2012年の加入資源尾数は321億尾であった。また適切な資源管理の結果、直近3年間(2010～2012年)の加入資源尾数が約300億尾以上の水準を保っていることから、動向については横ばいと判断した。





管理方策

伊勢湾のイカナゴ資源管理では、加入乱獲抑制を主体として、成長乱獲抑制を部分的に導入している。成長管理においては、事前調査によって把握されるその年の成長状況に応じて解禁日を前後に調整するなど、細かい管理を実践している。加入管理においては、親魚量一定方策を用いており、産卵期の禁漁に加え、親魚量確保のための終漁期の設定を行っている。以上の措置を基本とした取り組みは、平成18～23年度の資源回復計画と平成24年度から新たな枠組みの資源管理指針・計画によって継続して実施されている。しかし、再生産成功率を変動させるメカニズムは不明な点が多く、加入量を高位安定させるために必要な解析と検討を進める必要がある。

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- 2012年の漁獲量は14,875トンで過去20年間の上位7番目、加入資源尾数は321億尾で過去20年間の上位8番目
- 2011年の再生産成功率は平年並みであるが、残存資源尾数の確保によって加入資源尾数は321億尾となった
- 直近3年間の加入資源尾数が約300億尾以上の水準を保った

管理方策のまとめ

- 従来通り、事前調査によって漁獲開始日を設定する
- DeLuryの方法によって資源計算(尾数)を実施し、残存資源尾数20億尾以上を取り残す漁獲終了日を決定する
- 優良な親魚を確保するため、必要に応じて保護区の設定や保護育成期間の設定を行う

執筆者: 山本敏博・澁野拓郎

資源評価は毎年更新されます。